

平成26年度 学校経営理念と基本方針

1. 経営理念

「学力はお金と同じ、使わないと意味がない」

授業で培った学力は数値化で完結させるものではない。将来の社会構成員として活躍できる資質へ向かうべきものである。そのことを念頭に本校の学校経営理念を上記で表した。

2. 経営基本方針

キャリア教育の視点に立脚した

「毎日の授業づくりから学校づくりへ」

- ① G一学習を通した知識獲得とその活用の授業づくりを推進する。
- ② 授業づくりの指導観を学校行事等に反映させた指導を推進する。

平成21年度からG一学習（グループ学習）を通じた授業づくりで本校は知識獲得とその活用を目指してきた。この取組は授業で培った学力を学校行事等で生徒が発揮し学校教育目標を実現する「生きる力」の育成につなげるものであり、キャリア教育の実践でもある。その結果として民主的で平和な国家の形成者また自由社会の構成員としての資質を養うことに向かうと捉えることができる。「G一学習」は今年で6年目を迎え、これまでの「G-学習協同開発週間」を新たな段階（後述）へと進める。その新たな段階にむけて、教職員が一丸となって研究し西陵中学校の教育実践を進展させたい。また昨年度の「学力向上政策」にも継続して取り組み充実したものになることを願う。

「G一学習」の目標と目的

学習は、『知識』『技能』として「入力」されたものが表現という「出力」を経て、その表現の結果が新たな「入力」となり、再度「出力」されるという螺旋的な継続で成り立つ。一斉抗議型の授業では教え込みの「入力」で完結しがちになる。G-学習では「入力」したものを複数の生徒間で「出力」し合う。その結果、調整されたものが個人にあらためて「入力」される。この過程は個人思考→集団思考→個人思考という具体的な形をとる。この具体的な過程を通して、思考した内容を時系列に順序立て、他者がより理解しやすいように言語活動や身体活動で表現することが「思考・判断・表現」の目標である。G-学習はそれを目標としている。

「思考・判断・表現」を目標とするG-学習は、授業の場面で完結するものではない。学校の教育活動におけるあらゆる場面において「思考・判断・表現」の育成に努め、西陵祭での表現活動の充実と推進を通して学校教育目標の「正しく、仲よく、逞しく」という「生きる力」を育成することがG-学習の目的である。G-学習の目標の先にその目的がある。そのことを全教職員が理解し認識することが最も重要である。

3. 学校教育目標

「正しく 仲よく 遅しく」
=「生きる力」の育成=

授業等を通して多種多様な思考から主体的な思考と判断により意思を決定し行動できる生徒を育成する。

4. 目指す生徒像（主体性と社会性、協調性の追求）

学校教育目標に照らし目指す生徒像を以下の通りとする。

- (1) 確かな学力、健やかな身体、心豊かさを兼備した生徒。（主体性）
- (2) 基本的生活習慣を確立し社会適応能力を発揮する生徒。（社会性）
- (3) 人間の尊厳と共生の精神を発揮する生徒。（協調性）

*以上の中の主体性と社会性、協調性を「授業等」の中で培い育成し、学年や学校全体での教育活動で発揮させる。

5. 目指す学校像

「Effective School」=効果ある学校=

「Effective school（効果ある学校）」という言葉はアメリカで生まれた。ヒスピニッシュ、アフリカ系アメリカンが多い学校は、学力が低いと言われている。しかし中に高い学力を示す学校がある。そのような学校が「効果ある学校」と言われている。経済、教育水準が標準にいたらなくても教育効果を示す学校があるということである。経済や教育の厳しい状況にある生徒がいるという現実とそれらの生徒に学力をつけるという理想の両立を目指すのが「効果ある学校」である。経済力が学力を規定すると言われているが、義務教育の中では学力を規定するのは指導力であり「授業力」であるべきである。その「授業力」で「効果ある学校」づくりに取り組み、生徒の変容を促し、より正しく、より仲良く、より逞しい生徒を育成する学校への変容に尽力するのが本校の責務である。

6. 新たな段階への取組 =評価の研究=

これまでの5年間はG—学習の指導法に重点を置いた研究・研修に取り組んできた。6年目からはその指導のあり方がどうであったか、という評価の研究に軸足をシフトする。もちろんG—学習の指導の工夫・研鑽が前提となるものである。これまで支部授業研を含めた全市的な公開授業が実施してきた。その指導案作成に時間と労力を費やしている。しかしその指導案が授業の実際と離れたものになっていないか。指導のあり方に重点が置かれ、「本時の評価」について記述はあるが、評価場面での評価法等に工夫が見られないのが現状で、後の研究討議でも評価についての議論はされていない。評価は本来、総括的評価と形成的評価、自己評価等が

総合された観点別評価が評定に反映されるもので教育活動の根幹の一つであるはず。

しかし実際は多くが総括的評価に重点が置かれ、教科担任によるノート点検や提出物の状況を加えた観点別評価が評定に反映されている。これでは評価の客観性や信頼性、妥当性が担保されているとは言い難い。

これらの事を踏まえ、授業時における生徒の学習状況を評価に盛り込む形成的評価を含めた評価のあり方の研究を平成26年度の「新たな段階」として取り組む。

そこで具体的には以下の6点を目標に取り組む。

- (1) 4つの観点に偏りのない一定のバランスを保った評価となるように評価計画を作成すること。
- (2) 評価の信頼性と客観性を担保するために教科会で評価規準（項目）と基準を共通に認識し理解した上で授業実践すること。
- (3) 妥当性を担保するために、「本時の目標」を生徒に周知すると同時に、評価のBも周知する。
- (4) 毎時間に評価することは困難であるので評価計画にそった適切な評価であること。
- (5) 観点I（関心・意欲・態度）と観点II（思考・判断・表現）についてはペーパーテストや課題の提出状況に頼る評価は十分に信頼性や客観性、妥当性が担保されているとは考えにくい。評価には授業中における学習状況を加える必要がある。教科会では特にその研究と工夫が必要であり評価規準（項目）基準を精査して評価すること。
- (6) 総括的評価については本校では「定期テスト」がその代表であるが、その出題問題は形成的評価の対象となった指導・評価内容が中心となるのがセオリーである。逆を言えば、総括評価となる定期テストを予め作成してから授業実践することも推奨されている。これを逆評価と言われているが総括評価から形成的評価を考える授業づくりも参考にして、評価から指導を構築する方法も研究すること。

7. 今年度も継続した「学力向上政策」を実施。

- (1) 5感を使った活動を授業に組み入れる。 =学習内容の入力と出力=
 - ・ 音読・・・授業の一部に音読を取り入れる。目から入った情報を口から出力した言葉で耳から入力すること。前の授業の復習などに活用できる。
 - ・ 「まとめ」の作業・・・単元ごと、あるいは節ごとに学習（入力）した内容を整理しながら生徒自身の言葉でまとめ（出力し）て理解を定着させる。あるいは1時間の授業内容のまとめるスペースをとって記入する指導も理解力の定着に効果が示す。
- (2) 言語活動（記述力）を推進する。
=国語科で記述力の取組を、「他教科等」では観察力、考察力を、=

一昨年度、昨年度と国語科が中心となってNIE教育に取り組み「はがき新聞」等で記述力を育成している。他教科等では観察力や考察力等を培い、国語科の記述力と融合した取組で言語活動を充実させる。

(3) 「総合的な学習の時間」においてPPTを活用したプレゼンテーションを。

これまで学年等で取り組んだ内容を自学年で発表するという形態であったが、年間に1～2回は他学年に発表、報告をPPTを活用する機会をもつようにしてほしい。学習指導要領によるとPPTはすでに小学校で既習事項のはずである。必要があれば技術科と連携を。

例えば

- ・1年時にはPPTの復習をかねて自学年で発表。
- ・2年時には校外学習やチャレンジ体験授業等を1年生の前で発表。
- ・3年時には修学旅行や高校見学等を1、2年生の前で発表。

が考えられる。

(4) 小中一貫教育の推進（学習規律の推進）

- ・生徒の発表時における発表する側と聴く側の姿勢、態度を育成すること、は小中一貫教育の柱の一つにもなっている。これは昨年度から継続している内容であるが、発表時に起立をすることを励行させてほしい。
- ・始業時と終業時の礼をキチンとさせる指導を励行させてほしい。
- ・全体指導の場では顔、身体を指導者の方へ向ける等、身体表現の徹底。
- ・小小間、小中間の授業公開の実施。

8. 本校生徒の生活と学力を支える基礎課題

(1) 「指導の3原則」<挨拶、時間、掃除>の指導は本校生徒の生活指導の基盤。

* 挨拶・・・登下校、授業の始業と終了時、集会時、職員室入退室時などの挨拶をする。

* 時間・・・登下校、ベル着、提出物の期限などの時間を守る。

* 掃除・・・放課後の清掃活動、掲示物などの教室等の整理整頓をするなど。

(2) 「基礎学習」と「家庭学習」は本校生徒の学力を支える基盤。

基礎学習と家庭学習を学年の学習指導として有効に取り組み、学習確認プログラムの予・復習シートも両学習に役立て使用する。

* 上記①、②は従来からの「基礎課題」であり日常での取組として徹底する。

9. 学力向上から学校づくりに向けた教科の取組

(1) 授業の成果（学力向上）の発表の場として学校行事（西陵祭等）を位置づけて取り組む。

授業でのG一学習や学級等で形成した言語活動等の言語表現力、身体表現力を発表する場として学校行事や学年行事、生徒会活動などの行事を位置づけ企画運

當にあたる。特に、西陵祭は舞台発表と展示発表は学力発表の集大成として位置付けて取り組む。

*「共同開発週間」は8月、9月、3月は実施せず、授業で培った「学力」発揮の場として9月の「西陵祭」と3月の「送る会」を「G一学習」の活用の場として位置づける。したがって「共同開発週間」年間9回の実施となる。

(2) 学力向上委員会、教科主任会、教科会を学力向上、授業づくりへ効果的に機能させる。

学力向上委員会を上位組織として教科主任会及び教科会を関連づけ双方向性のある情報交換を行い、各組織からの情報を把握しながら授業づくり、学力の向上を図る。特に教科会が授業づくりの生命線である。教科会で相互の意見交流や実践交流を通じて補完しあう教科会として、ひきつづき授業力向上を図る。

10. 「授業等」以外での学力向上対策

- (1) 基礎学習と基礎テストを実施して基礎・基本の定着を図る
- (2) 家庭学習をこれまで通り学年の取組として継続、推進する。
- (3) 「土曜学習」及び「受験対策冬季講座」を成章高、明徳高、西山高、京都光華高、京都学園高、両洋高、京都外大西高から講師派遣を頂いて実施する。

11. 言語活動の重点目標

言語活動には人との関わりに繋がる人権教育や道徳、広く言えば社会性や協調性との関わりがある。言語活動を取り入れた授業や学級活動、生徒会活動等を計画し指導することは学校教育目標に直接つながる取組である。考えたことを形にする言語活動の基本スタイルと2つの目標を設定して取り組みたい。

(1) 基本スタイル

- ・単語の羅列に終わらない、文として表現すること。（小中一貫教育の取組）
- ・生徒会や学年、学校行事ではカンペを使用しない言語活動の徹底を。

(2) 目標

- (ア) 思考の記述化。この記述化を切り口にして言語活動を推進する。国語科がNIEに取り組むが他の教科・領域においてもレポート等で記述力を發揮させることを意識した取り組みをする。西陵祭においても展示発表の充実を一つの具体的な目標とする。
- (イ) 思考の口述化である。意見発表に「なぜ、そのように考えるか」「他人の考え方や意見と自分はどこが違うのか、またどこが同じなのか」を明確にして発表させることである。

12. 開かれた学校

- (1) 学校行事の保護者・地域の紹介、地域行事への生徒や教職員の参加促進、学校コミュニティープラザ事業・西陵文化まつりの推進を通して、学校・家庭・地域の連携を図る。
- (2) 学校ホームページについて、タイムリーな更新により保護者、地域の方々に情報公開すると共に学校HPだよりを配布し地域に対して校門掲示板を活用して貼りだし学校情報公開に努める。
- (3) 「学校だより」を月はじめに配布する